

義相續も打忘れ、人倫五常の道も踏み外してしまふのぞ。

三三四

念佛行者は節操を守り、名利人我の悪魔に打勝ち、正定聚の菩薩たる内徳を省み、御相續を勇進なされ

三三五

はまつて、御念佛御相續なされ、此心掛をも自力なりて懈怠の凡心に任せるなご、は勿體なひことなり、此心掛は我心に發起するものではなひ、願力の御もよほしぞ。

三三六

蓮如様の御言にたしなめご御すゝめなされて、後にされはたしなむころも他方なりご仰せられた。

三三七

ねてもさめても稱名念佛せよこのたまへる、高祖様や蓮如様の御教化を掛直あるものと思ひなさるなごにかくも議論をやめて實行したまへ。

三三八

石を割るは割り難けれど、割れば判然二になる蓮の莖を折るは折り易けれど、其間に細き絲が残

りて判然はなれぬものちや、智者達の此世を厭ふは石を割る如く、我々のは信心の御催ほしにて世を厭ふべきを知らせて頂だけども蓮の莖を折た如く、全く縁を断つことは叶はぬ、只稱名相續して油断なくんば、好きな世間の名利勝他も知らずくの間違やることになる。

三三九

俗諦の勤まるる勤まらぬことにて往生を彼是云ふは十九願、修諸功德の行者であらふ、第十八願の行者は願力不思議を信受するとき、往生は治定せしめ

たまふのもへ其論は入らぬけれども、身體には衣類帯なごを付て美しくしき姿なる如く、信心の身體には稱名相續の衣類も着用し、仁義博愛の帯も締めて美しくしき、念佛行者とならねばならぬのぞ。

三三〇

他人に對して己れを高振る心なく、常に佛恩に對して慚愧を懷き、少しにても己れが行ひに善きことあらば、佛力の御所爲と喜び、必ず我情を募りてはならぬ。

三三一

たすくるぞよの明かな勅命ぢやから、信せねばならぬけれども、信じた機に止まるごいふは間違ひぞ

二三三

富士の山でも、寫真にすれば小さき紙切れにみゆる、南無阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり、御浄土へ參らせて貰ふて、百味の飲食應報の妙服頂戴する仕合せ、又娑婆へ立戻り還來穢國度人天の利益も、往還二種の富士山を寫して居るが信者の胸ぢや。

二三三

聽聞なざる、御同行に、二種がある、其は御教化を聞き覺へて弘め様ごいふのご、御言通り御用ひするごいふごの、二種ぢや、前者の聽聞なら弘まらぬのみならず、自分の御法義まで衰微するが、後者の聽聞なら自分の御法義はもごより盛大になりて、他にも弘まるものなり。

二三四

御信心頂たごて、形の上に變りはなひけれごも、超世の悲願きしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねご、こゝろは浄土にすみあそ

ぶこのたまひて、心は浄土の人数ぢや、されば疔癩も小言も普通りではすむまひぞ。

三三五

魚を盛た皿は、魚は無くなつても臭氣は残りて居る、乃て目に問へば無しと答ふれども、鼻に問ふと澤山あるといふ、だから御互ひは目に立つ様な雑修の魚はなからふけれども、自力の臭氣が残りては居らぬ歟。

三三六

御佛壇が奇麗な御莊嚴が立派ぢやとほめるものは

あるが御慈悲を喜び御念佛を稱ふるものを、ほめるものはなひ様ぢや、ごうも専修といふことが分らぬとみへる、

三三七

御花の枯たは胸に針刺す程こたへるが、御念佛の枯たのは何共思はぬのでなひ歟、あんたはよく如来様の御給仕が出来ますと譽められると、忽ち傲慢を起す、是等は魚の臭氣が未だ皿に残りて居るのぢや

三三八

真宗の教へは悪人正機く、悪人を製造するの歟

こいふ人がある何の製造してかあるものぞ、昔は辻々に高札が建て有て、鰥寡孤獨廢疾の者を憐むべしと揭示してありたけれども、高札に鰥寡孤獨廢疾の者を憐むべしとあるから毒藥吞で廢疾にならふ夫妻父子、互に殺して鰥寡孤獨にならふとしたものはなかつたぞ。

三三九

御本願の汽車に乗るには、貧瞋痴の模様、白地の凡夫が上等切符、臨終の合圖の鈴鳴次第阿彌陀様に切符見付られ、地獄へも落ちずして極樂へ参るべき

身なり、歎きなさるな世間でも上等切符持て居て、汽車に乗るまひと泣くものはなひぞ。

三四〇

雑行の小路迷ひ易きこいふのは、御同行方雨の降るに参りて来る途中、下駄の緒切て中止した人のあつるを見た、其時此所まで来て歸ることは、ごうしたつまらぬ事ぢやこいふ、裏には己れは雨が降ても道は悪うても、参るといふ憍慢心が起りて居るぞ此通心と身體とにかゝる仕事なら、皆煩惱に成て仕舞ふ分るであらふ。

二四一

人間といふものは、橋慢心の強ひもので習字は彼れより下手なれども、算盤は上手とか、三味は下手でも踊りは上手とか、何とか角とかいふて他人を下目に見たひのが持前ぢや。

二四二

獲信の人は御報謝と俗諦門の心掛が第一なり、信心未定の人是我機の方に目をかけず、只本願の不思議一つにて御助けぞこ、往生の大事を全然佛力に任せ、其上から御恩報謝の念佛を懈怠なく相續して、

常に御慈悲の廣大なることを喜び、渡世家業を勉強し、世間の交際を美しくし、品行行状を正くなさひ。

二四三

冬の間は鶯も寒氣に閉られて聲を出さぬが、春の陽氣に催ほさるゝこ、おのづから美しくしひ聲をして囀るぞ鳴たは鶯なれど鳴かせたは春の陽氣なり、稱へたは我々なれど稱へさせて下さるゝ光明の御めぐみがあるのぞ。

二四四

正眞の品物なれば何でも好ひこもいはれぬ、たこ

ひ正眞の品物でも、用ひ方によりて利害がある、正眞無垢の純金を如何に上等品なればこて、金屑を眼球にすり込だら大變ぞ、念佛は無上寶珠なればこて自力廻向に用ひて極樂往生し度と思ふは品物は上等でも用ひ方がいけなひ。

二四五

素人の商は一品で拾五錢も貳拾錢も引て呉れ、負けられぬといふて居るに、緇人仲間の商を聞て居ると、壹厘に足らぬ五毛が七毛を引けこか引けぬこかといふて居る、能く聞てみるに、成程足袋一萬足手拭

二萬筋といふ賣買ぢやから、小さひのが積りて大金になるからぢや、御報謝の稱名に行住坐臥時處諸縁を御ゑらびかなひのぢやから、一聲二聲が積りてみれば大層な數になるのぞ。

二四六

青銅や眞鍮の鍋は立派なれども、油断すると錆が出る、土鍋は素人好きせぬが錆の出る氣遣はなひ、報恩講法事などを勤むるといふにくらべて、御念佛は土鍋の様なものなれども錆の出る憂ひがなひ、佛事は勤め様によりては、貪欲やら瞋恚やら愚痴やら

橋慢やら五色の錆が出て来るぞ。

二四七

死んだら御浄土へ参れるかご考へるご、初めは参られる様にありても、只今にも命がなくなる時ご推し縮めると全然参られぬごも思はれぬが、何やら明らうなひけれごも、まあ参られるごして置かふごいふ位な御安心ぢやなひ歎、夫なれば方角違ひをして居るのよ、御浄土を目的にして居るから間違ふ、當流には御浄土を目的に信ずるといふ御教化はなひ、佛願を信ぜよ、彌陀をたのため、不思議の誓願に疑ひ

はるゝ等種々御言は替りてありても、みな御慈悲を目的に信ぜよの御教化ぢや。

二四八

説教を聞くごきや、嬉しひごきの心では、ごうやら御浄土が近くなりた様に思はれ、参られさうにあらけれごも、若し左様なひごきは、是ではご案ずる是が如來様の御目的を知らぬからぢや、如來様の御目的は苦惱の羣生海を悲愍したまふごあるのぞ。

二四九

何程聞ても胸が定らぬごか、安心が出来ぬごか何

をいひなさる等覺の彌勒様さへ、自分の力をすて、
如來の弘誓に乗するごあるぢやなひ歎、豆腐は柔か
ひのが性質、凡夫は胸の定らぬのが性質ぢや。

二五〇

信心は如來様からの貰ひ物、乃てつまらぬ我々で
も、御信心頂た上は我さへ御淨土へ參ればよひこい
ふ様な事ではならぬ、一人なりごも御法義に導さま
せふぞ、夫がはや十種の益の常行大悲ごいふものぞ

二五一

善導大師は仰ぎ願くば、一切の行者等唯佛語を信

じて、身命を顧みされご仰せられたぞ、昔は諸行無
常の四句を聞くにさへ、身命を投げて覺悟なされた
御方が有たでない歎、はまつて聽聞なさひ。

二五二

西と東へ同時に走れごいつたら、無理ぢやごいひ
なさらふ、夫なら身をすて、のぞみもごむるご、ろ
より、信はうべごご仰せられたを、彼是いふ筈はな
いごごぞ。

二五三

たごひ正義たりごも繁からむごごを停止すべご、

まして世間義停止候はぬこそ然るべからずとは、蓮
如様の御教誡なり、正義とあるは五正行の前三後一
夫さへ、淨土參の助けにするは固より雑修といふて
嫌ふ、たごひ報謝のために勤むるのでも繁き事は停
止せよとあるのぞ、一向に稱名相續なされ。

二五四

如來様が我々を參らせねば置かぬとて御成就下さ
れた御本願也へ、我々が參るのぢやなひ、如來が參
らせて下さるのぢやと頂てみなさひ、御淨土參の不
安心も喜ばれぬも入たものぢやなひ、安心して喜ぶ

ばかりぞ。

二五五

斯う思ふたの、疑ひ晴れたの、稱へらるゝからの
といふは、皆是凡夫自力のはからひ、一切役にたゝ
ぬ、左様なら信じても、役にたゝぬ歎といひさらふ
けれども、信じたといふ自の功を募るのがいけぬの
ぞ助くるとある勅命を聞て信ずるばかりぢや。

二五六

何故酔はぬであらふといふから、ごの位酒呑だの
歎と問へば、呑みはせぬと答へた、何故喜ばれぬで

あらふ、あんた御慈悲を頂て念佛なさる歟と問ふたら、何と答をなさる積りぢやいな。

二五七

智恵がありて信仰のある人は上等の眞宗同行、それは多くはなひ、されば智恵ありて信仰のなひのこ信仰ありて智恵のなひのこ並べてごちらが可ひといへば、智恵ありて信仰のなひ人より、智恵なくとも信仰のある人が可ひ、何故歟といふに、是は迷ひを離れることが出来る、乃て智恵の發けた理屈のみの同行、百人よりは智恵なき信者一人が拙納は好きぢや。

や。

二五八

腹立つ時は立るが、聊も残らぬ後はさつぱりしたものなり、夕立の晴た如くぢやご得意顔にいふ人がある、考へてみたまへ、夕立は晴れても、その雫が窓より居間内の鏡にかゝつた時は、鏡に必ず曇りが付くものぞ、たごひ一段の腹立にても心の鏡に曇りは残りて居る筈ぞ。

二五九

いつも御客心地で居るから、善き物を先に握らふ

旨ひ物は先に喰はふとする、他人を御客ごみて自分
を御取持側に置く氣になりなさひ、他に世話せらる
時は一寸の心も五分が三分に縮まれど、他を世話
する時は一寸の心も一尺、或は一尺五寸にも伸るも
のぢや、乃て常に他を世話する心持で世渡りしてみ
れば安樂なものぞ。

二六〇

一月に近くなりた、新衣がなければ恥かしひ心
配する娘は母が立派に仕立て帯まで揃へて、簞笥に
入れ置くことを知らぬからぢや、母より下さることに

を聞たら、心配はなひ筈、南無阿彌陀佛の御成就は
私一人の爲と聞たら安心ぢやなひ歎。

二六一

法然様は衣食住の三は念佛の助業なりと仰せられ
てあれば、御念佛しながら働きますせう、地獄種製造
の身體で有た時さへ、著せたり喰はせたりしたので
今は淨土行の道中念佛行者、御相續する大事の身體
なれば、大切にせにやならぬ。

二六二

いかほご喜ばれても喜んだのが御淨土參の用には

たゝぬ、聖道の修行では五十二段の内四十段に入ても迎も喜はれませぬとあるのちや、ごもかく御助けに間違ひのなひ御本願を信じて、稱名相續なされ、御喜びは随て出ます。

二六三

正宗の名剣でも鑄が價値にはならぬ、智識はよけれごも小理屈は鑄ぢや、鑄は價値にならぬ小理屈やめて御本願の不思議を信じなさひ。

二六四

信を強く勸むれば、このまゝといふ所から稱へず

にすまさうといふ邪見になり、行を強く勸むれば稱へねば参られぬであらふ歎こ、我機の方をつくらふ自力になり、困つたものちや、よく聽聞して片輪にならぬ様になさひ。

二六五

眞宗は御淨土くといふて、祈念祈禱を貶斥する一心一向の宗旨ぢやとて、あの様にいはずごもよからふといふ人があるが、祈念祈禱を貶斥するのは、神佛を謗るのではなひ、平生は前を通過しても知ぬ顔で居乍ら、難儀の時に一寸米一升貸して呉れ、金

壹圓貸して呉れといふ様に用事のなひ時は拜みもせぬ、神佛に何歟難澁な事が起ると、やれ病氣を直して下さひ、やれ富貴に取立て下さひ随分面の皮の厚ひ話ぢやぞ。

二六六

真宗には何歟といへば、前業の所感くといふて祈念祈禱を嫌ふて、此世の御利益を妨碍すると思はれ様が、真宗には御祈禱せずとも、此世の利益は澤山ある、一寸出してみませふ、信巻に現生十種の益あり、和讃に現世利益十五首あり少しも不足はなひぞ。

ぞ。

二六七

観音様信仰もやめた、地藏様信心もやめた、何も角もやめたといふから、一心一向餘念なく、彌陀をたのむ真宗同行かと思へば、御籤もらひや、力角探しは盛りにして居る、何といふこと歟。

二六八

彼人はもはや、信仰をやめたさうなと思ふ人が、聽聞に出て来るといふは、彼が信仰をやめたのではなひ、一時煩惱より覆はれて懈怠したのぢや、君子

の過ぢや、猶日月の蝕の如しといふ事がありて、信
仰者にも信心に月蝕があると思へばよひ、本當の月
蝕なら時期に定りがある、若し雲の覆ふたのなら、
風によりて忽ち吹き拂はれ、月の光は拜める、煩惱
の雲に覆はれた、月蝕の同行なら、同行同志が御喜
びの風を吹かして誘ふ時は、懈怠の雲晴れて明かに
御相續することになる。

二六九

病院へ入てみたれど、何うも病氣が治りませぬ、
御藥何程呑みなさつたといへば、一口呑たれども苦

ひ辛ひ味を好かぬから、始終呑まなかつた、夫では
病氣が直らぬ筈ぢや、今も説教法話を一口聞ても、
煩惱の奴は好かぬから歸り途で吐出してしまふ、吞
めといふ醫者の藥は好かずとも、吞まねば病は療ら
ぬ、信心念佛掟の御すゝめ、真宗の病院へ入たら用
ひねばならぬのぞ。

二七〇

佛説は金杖を折るが如しで、經論釋と分れて居て
も、釋迦如來の御説法に一滴も餘教は交らぬ、そん
なら一宗でもよからふにといふ歟も知らぬが、梅の

花に何故咲た歟、桃も李も梨子も櫻花も咲たから、
 汝は入らぬといふても時節で咲くので私事ぢやなひ
 と梅は申すであらふ、是が天地の道理、末代今時煩
 惱の雪中に、眞宗の梅花が色香を放つまひなら何う
 ぢやふ。

七里恒順師語録終

附 録

七里和上手翰

恭賀新年久敷他郷に御留學に相成候得共氣候の變
 水土の異なるにも拘はらず道體健康且病魔の襲來
 も無之進學勤業可被爲在と奉拜賀候隨而迂老無事
 在坊依舊無變念報相續仕候間御放慮是祈候然者當
 地の景況昨年は如豫期國會も開場に相成候得共國
 利氏福の増進は未だ目的も不相立局外より觀すれ
 ば唯名利貪瞋の競争場歟と怪まれ加ふるに宗々の

狀況鬪諍堅固の預言をして虚しからさら令るの事
 實不少世態は予をして佛語の不虚を信ぜしめ視線
 を世の變態に注ぐ時は一憂一喜確定し難く候得共
 憂に付喜に付却て不虚の佛語を信じ念佛相續仕候
 兼而御示諭の趣も有之佛生國古今の情態に付ては
 久敷懐き居候疑塊も有之候得者質疑を呈し度存
 立候事も有之候得共種々障礙も有之不果所懷事遣
 憾に存候疎懶今尙其儘に殘居候向來幸便に托し新
 年を賀し併て從來の厚誼を鳴謝す唯々翼くば法兄
 不相變健康を保し修業修學併進あらん事を

敬白 頓首

七里恒順拜

明治二十四年二月五日

小泉了諦法兄

寶蓮座下

同

貴兄御病氣意外御重症之趣承り過日西京より二三
 の同志連署にて御容體相伺候處早速常溪君より復
 束を頂き難有披見仕候然者病勢近頃彌よ増長の由
 扱々有漏雜染の境とは申し乍ら實に傍觀猶忌はし
 きの感に耐へず況や正に其難衝に當られ候ては如

何計りか御困迫の御事と奉遙察候さて舍利弗か境
 遇は五藥荆棘にして螺髻梵王の眼界は只天人常に
 充滿とみるこれ識見の不同にして所見の物體に於
 て固定の性あるに非ず人の病も亦此理に外ならざ
 るべし維摩は病を借て大衆に眞理を示し古への行
 者は病患を得て偏へに之を悦ふといへり貴兄即今
 如何思召さるゝか迂生時々貴兄の心中を想像し自
 己の將來を假想し大に佛恩相續の良縁と致し居候
 縱令肉體の病苦に狂はされ始終偏へに病縁を喜ぶ
 といふに至らざるも寒極りて陽を發するか如く苦

中自ら愛法の念を据へ歡喜の思を發得せらるなら
 ん惟みるに法味を樂むの心は信心相續の本情にし
 て痛苦を感じるの情は只月下の行雲の如きのみさ
 れは病魔頻りに襲ひ來れるも貴兄にありては法味
 愛樂の愉快を促かす良縁なり此良縁を得て念々に
 往生の素懷を期す何そ古への行者に恥んや遠近有
 縁の緇素病を訪ふて床下に至るや貴兄か苦叢の中
 に安臥して天真爛慢念念相續の状態を見る毎に各
 自の信根を増長すへし益々不言臥褥の裡に在て自
 然に有縁の衆生を開示するまゝ維摩居士の化導に

比すへし貴兄よ予は病苦を忘れて歡喜すへしといふには非ず病苦煩悶の中に自由隨意の歡喜を失はされと衷告するのみ貴兄若し因縁未だ熟せずは聖道の修行を爲すならん識らす此際猶持戒禪定を修むるの力ある歟三愛の境に於て斷乎として動かさるの健心ありや恐くは分にあらざるへし若し又自力願生の行者たらんか此病苦を意こせず正念修行することを得へきや否予謂ふ正念は求むるに失して自然に之を得るものなりと衰殘微弱の身を以て出離の大事を負擔すれば精神之か爲に錯亂すへし

大事を擧て佛の願力に一任すれば身心安樂にして自然に正受を得んされは病苦煩悶の中に幸に正念相續の悦ひあらは全く是佛願の賜なる事を忘るゝ勿れ抑も喜ひには古への行者を慕ひ化益には在世の居士を思ひ苦中樂を生し樂邊苦に侵されず念々に安養の素懷を期する事豈亦愉快ならずや迂生病床にあるの思想を爲し聊か所懷を述ふ貴兄幸に涵容したまは、何の幸福か之に加へん今生の再會は約し難し期して差はさるは蓮華臺上俱會の樂みなり 艸々頓首

明治二十四年六月一日

蓮谷靖様

七里恒順

八

同

病苦定めて難忍可被爲在と推し候へとも暫時の事に候得者御耐忍可被成候病床中生來今日迄の所業は追想するも無益なり榮辱は獨り滅して昨夢の如く痕なし罪業は願力に消されて淡雪の如く形なし念して益なく用なければ捨て問ふへからず命は一瞬に迫れば浄土は一紙の外よりも近し唯願力の不思議を仰ひて喜ひたまふへし今にも大悲の尊體拜

したてまつるを悦ふへし初めて生るゝ時

彌陀告言諸佛子 極樂如何彼三界

新往化生俱欲報 合掌嗚咽不能言

さそく御樂みあるへく拙僧も後より参り候間半坐を分けて待ちたまふへし南無阿彌陀佛

明治二十三年一月二十五日 釋 恒順拜

先 登 幼 郎 玉蓮座下

同

先日御來訪の節は海外幾多の奇説珍話を老耳に注入せられ未だ見さるの地を踏むの心地し此上なき

壯快を覺へ申候殊に佛蹟に就て古今の感慨を御話
御坐候事迂老も御同感に候得は彌よ命のあらん限
り大師の高迹を追歩し御油斷なきか肝要の儀と奉
存候然者蒙御尋問候三ヶ條何れも法兄御意見の如
く御決著可然と奉存候。

明治二十五年三月二十八日

七里恒順拜

小泉了諦法兄

寶蓮座下

同

諸舊臘は非常の寒氣貴兄には御病氣の趣承り

驚入候併御病氣も無量光明中に候得者定めて病苦
の中にも法樂は被可爲在と奉推候兼て御聽聞の通
り若不生者の願力は不虛の主願に候得は往生の大
事は遲疑なく一任して機の善惡を顧みず不捨の誓
約を仰くばかりに候へは機情の煩惱も妄念も歡喜
の念の厚薄も懈怠も散亂もその儘打すて、唯願力
不思議を御愛樂可被成候尙平生に御報謝の類も種
々可有之候へ共御病床には餘事も御心に不任事而
已に候へは不顧他事専心に稱名相續被成度御衷告
申上候前業因縁不空候へは重て今生にて拜顔を得

候へ共若し再會を得ずんは蓮華臺上俱會一處の快
樂を可期候先は御病氣御伺旁併て高吟御寄送の厚
意を奉謝候 敬白頓首

明治二十五年三月十七日

七里恒順拜

西 秋谷様

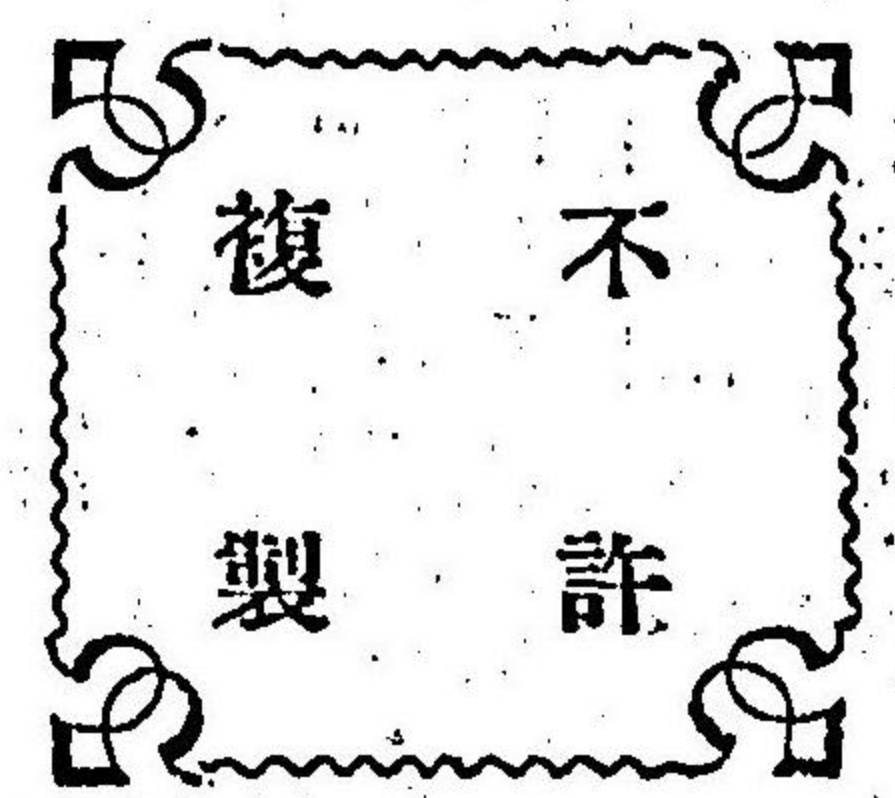
明治四十三年十一月十五日 印刷
明治四十三年十一月二十日 發行

(定價金貳拾五錢)

編纂者 小泉了諦

發行者 松田善六
京都市油小路通花屋町上ル四若松町
十七番戶

印刷者 小林庄兵衛
京都市醜ヶ井通魚棚上ル佐女牛井町
三十二番戶



發行所 京都市油小路通花屋上ル
振替口座大阪二三四九番 顯道書院

著者師名	書名	代價及郵稅
七里和上法話	安心法義示談	八錢 貳錢
七里和上法話	信後相續談	八錢 貳錢
七里和上法話	法話聞書	拾貳錢 貳錢
七里和上法話	本願成就文法話	拾貳錢 貳錢
七里和上法話	彌陀大悲讚法話	拾貳錢 貳錢
七里和上法話	御正忌法話聞書	拾五錢 四錢
七里和上法話	現世十種益法話	八錢 四錢
利井和上法話	歎異鈔法話	七錢 貳錢
利井和上法話	安心決定鈔法話	貳拾八錢 四錢
利井和上法話	橫川法語法話	五拾五錢 八錢
利井和上法話	六字釋法話	八錢 四錢
利井和上法話	末代無智章法話	六錢 貳錢

發行所

京都市油小路花屋町上ル
振替口座大坂二三四九番

顯道書院

著者師名	書名	代價及郵稅
真野義彦	祖師舊蹟二十四輩順拜記	壹圓貳拾錢 八錢
武田智順	祖師御繪傳指說	拾六錢 四錢
真野大誓	祖師御繪傳觀說	六拾五錢 八錢
安國淡雲	蓮如上人御一代聞書講話	六拾錢 八錢
是山惠覺	蓮如上人御一代聞書略解	八拾五錢 八錢
勘學僧朗	蓮如上人御一代聞書略解	八拾五錢 八錢
中谷淨林	菊蓮活用自問自答章說教	貳拾六錢 四錢
中谷淨林	大原問答說教	貳拾六錢 四錢
中谷淨林	中蔭年回說教	貳拾錢 四錢
中谷淨林	現世の得益	四拾錢 六錢
翔月政臣	三世因果證據錄	五拾五錢 六錢
野世溪真了	椿原真福寺七題說教	四拾五錢 六錢
大内青帶	三部經譯解	五拾五錢 八錢

發行所

京都市油小路花屋町上ル
振替口座大坂二三四九番

顯道書院

著者師名	書名	代價及郵稅
利井和上法話	●八萬法藏章法話	參錢貳錢
利井和上法話	●在家尼女房章法話	參錢貳錢
利井和上法話	●男子女人章法話	參錢貳錢
利井和上法話	●信心獲得章法話	參錢貳錢
利井和上法話	●一念大利章法話	參錢貳錢
光善山 靈巖	●宗現世利益はなし	六錢貳錢
釋了邦	●宗一口さとし	六錢貳錢
結城清壽	●譬喻合法一口辨	貳拾六錢四錢
結城清壽	●譬喻因緣說教指南	貳拾六錢四錢
小泉了諦	●宗安心譬喻合法百話	貳拾六錢四錢
小泉了諦	●新撰實用目出度教誨	五拾錢八錢
小泉了諦	●戊申詔書勤儉座談	拾六錢四錢

發行所

京都市油小路花屋町上ル
振替口座大坂二三四九番

顯道書院

著者師名	書名	代價及郵稅
德榮寺	●譬喻因緣領解文說教	貳拾錢四錢
加藤咄堂	●佛教大意十界說教	貳拾錢四錢
佐々木狂介	●實驗の信仰	拾五錢四錢
佐々木狂介	●信仰道こるへ	拾參錢四錢
佐々木狂介	●信仰界指南	拾參錢四錢
佐々木狂介	●大悲の一滴	六錢貳錢
千葉了辨	●編狂介法章	拾貳錢貳錢
曾我是一	●通俗平易來世觀	貳拾六錢四錢
曾我是一	●婦人修養訓	參拾五錢六錢
鈴木法琛	●眞宗と通佛教	拾六錢四錢
丹靈源	●世を渡る道を示すの法談	貳拾錢四錢
雲山龍珠	●六方禮經講話	拾五錢貳錢

發行所

京都市油小路花屋町上ル
振替口座大坂二三四九番

顯道書院

261
676

著者師名	書名	代價及郵稅
福專寺龍	樹章說教	貳拾六錢 四錢
福專寺	淨土和讚二首說教	貳拾錢 四錢
勝山善讓	往生要集法話	五拾五錢 八錢
勝山善讓	五惡段百席談	五拾錢 八錢
勝山善讓	御傳鈔百席談	五拾錢 八錢
勝山善讓	正信偈百席談	五拾錢 八錢
輦名信光	選擇集百席談	五拾五錢 八錢
菅瀨徹照	一代記說教	七拾五錢 八錢
菅瀨徹照	一代記說教	貳拾五錢 六錢
菅瀨徹照	蓮如上人御奇蹟說教	貳拾錢 四錢
藤澤了義	報謝問答	拾參錢 四錢
釋立智	御傳謝德記	五拾五錢 八錢

發行所

京都市小油路花屋町上ル
振替口座大坂三三四九番

顯道書院

